

清七 「そんな馬鹿じゃありませんよ！」

登与 「お前はね、自分が気が付いてないだけで、大馬鹿なんだよ!!」

清七 「……（深く納得）知りませんでした」※

深いF・O

×

×

×

※（前のシーンの続きで、俳優のキャラクターによってこのせりふを付けたず）

清七、登与を鋭く睨む。

登与 「何だい、その眼は」

清七 「生まれつきなんで……何ですか、その顔は」

登与 「文句があるなら、親に言っとくれ」

清七 「(千代に) 何ですか、この顔は(と、登与の顔を指す)」

登与 「(千代に) 何ですか、この顔は(と、自分の顔を指す)」

清七 「人が見て転んだら、どうするんですか!」

登与 「どうするんですか!」

千代 「(よく考えぬいて、しかも、厳かに) ……転んだら……立つし
かないだろう」

間。

清七と登与、何故か急に世間話。

清七 「裏の、どぶ板ひっくり返したらネ、蛭ひるが出てきたんですよ」

登与 「……夜にかい」

間。

清七 「……昼ですよ。……裏の空地に、穴があいてるんですよ」

登与 「(信じられないほど、驚愕して) どうして!!」

間。

清七 「……(あっさり)と誰かが掘ったんでしょう? ……(神妙な顔をして)

〃 鶴は千年亀は万年〃 っていいますよね。隣のご隠居の飼っていた鶴、

昨日死んだんですよ」

登与 「千年目だったんだろ」

清七 「私がね、首絞めちゃったんですよ」

登与 「隠居のかい!」

清七 「(驚いて) 鶴ですよ!」

登与 「人殺し!!」

清七 「鶴殺しでしょ——ッ」

×

×

×

7 雪。

「清七さ——ん」

二の蔵陰に、幸薄そうな女——雪(十八歳)がいる。

清七が来る。

清七 「何だい、今取り込んでんだ、後々、(いやらしく) 八幡様で

待ってなよ」

雪 「清七さんッ」

清七 「えっ」

雪 「(口調が少し、まだるっこい) もう、諦めがついたでしょ、

琴さん……」

二人「ボーン(琴の膨らんだお腹を両手で表すしぐさ)」

清七「(驚いて) お前、何で知ってんだッ」

雪 「聞いたの」

清七 「誰に?!」
雪 「琴さん。私たち子供の頃からのお話し相手だもの、何だつて話すのよ」
清七 「何だつて?」
雪 「何だつて」
清七 「何だつて?! ジャッ!」
雪 「そう、知っているわよ、私と清七さんのあれやこれや」
清七 「あれや?!」
雪 「これや。ねえ、だから早く一緒になりましょうよ、お父つあんも清七ならいいだろうって」
清七 「お前、お父つあんにも?!」
雪 「他の人も読んだわ」
清七 「読んだ?」
雪 「ええつ、うちの家の前に立て看立てといたから」
清七 「立て看?! 何てツ?」
雪 「《清七に大いにモテアソバレタ、雪》」
清七 「《清七に大いにモテアソバレタ、雪》何っ!!」
雪 「今じゃ、町内の噂の種よ。よっ! 町内の人気者」
清七 「(うっかり、ニッコリ照れる) よせやーい…… (気づいて) お前! そんな事されちゃ町内歩けねえじゃねえか!」
雪 「散々歩いたじゃない、一年も……」
清七 「お前、俺の許可なく一年も前から立て看を」
雪 「ええ、今のは立て替えて三本目」
清七 「三本目?!」
雪 「今のが一番気に入っているのよ。清七の文字が金文字、雪の字が朱で浮き出しているの……しかも似顔絵入り……」
二人、似顔絵のように顔を並べてニッコリ、ポーズ。
清七 「ああ、もう駄目だッ」
雪 「そう、もう駄目ね……だから早く一緒になりましょうよ。お父つあんも清七は散々遊んだ男だからメオトになれば落ち着くし、お前も百人斬りをやった女だからお似合いだつて……」
清七 「百人?!」
雪 「そう、百人目、おめでどう!」
清七 「(また、思わずニッコリ) ありがとう…… (我に返り) お前、そんなことやってると下駄の鼻緒で鼻の穴ふさいじゃうぞ」
雪 「何のお呪い?」
清七 「お呪いなんかじゃねえや、お前みたいなお喋り女は息が出来なくなつて死ぬつて言つてるの!」
雪 「言つたわね!」
清七 「ああ言つたよ、言つたらからどうしたッ」
雪 「こうなつたらあんたもね」
清七 「下駄の鼻緒か」
雪 「下駄の鼻緒なんか鼻の中に入れてないわよ」
清七 「おお、じゃ、何を入れるんδει!」
雪 「出刃包丁で……ちよつと待って」
清七 「(素直に) うん」
雪、緩慢な動きで懐から晒しに巻いた出刃包丁を取り出す。

清七「おや、お前そんなもの俺の鼻の中に入れるのか?!」

雪「何言ってるの、こんなもの鼻の中に入れてたって、鼻血が出るだけじゃない、これでお前の喉笛かき斬ってやる」

清七「……お前、それじゃ洒落にも何にもならないよ……お茶啜って笑えないよ」

雪「(凄んで) 笑えないわね、死ぬんだから……散々あたいを大いにモテアソンデ……」

清七「だつて(震えている) 百人だろ」

雪「(一段とまだるっこい口調で) 百人がどうしたの、百人が二百人だろうが、あたいは一々本気なんだよ、命懸けなんだよ」

清七「身体……張ってんだア……ッ」

雪「アタボウイヨ……」

と、突き出した包丁の先で清七の鼻を突く……。

清七「……痛ッ」

8 提灯。

町外れの辻。

大番頭、番頭、手代、丁稚たちが、手に手に提灯を下げ「琴さまー」「お嬢さまー」「琴さまー」「お嬢さまー」と、琴の行方を捜している。

登与「琴ーっ」

千代が走り込んで来て、

「……どうだい」

登与「何処にも」

千代「川原の方は行ったのかい」

登与「ええ……何処行ったのかしら？」

そこへ、出刃包丁を手にして気が触れたような雪が気が走り込んで来る。

雪「(泣きわめく) 清七さアくん！」

登与「(雪に) 清七?!」

雪「何処にもいない! あたいが悪いんだ……清七さアくん……殺さないから出てきてく……よ! 清七さアくん!」

雪、狂ったように包丁を振り回す。

千代、登与、その包丁の下を掻い潜る。

雪、泣きながら去る。

一瞬、怪我はないかと身体をあらためる千代と登与。

二人、無事なことにホットする。

千代「琴ー! 琴ー! 何処へ行っちゃったんだろうね、これじゃ、昔とそっくりじゃないか。迷子になったあの子を探して……あの時は、与吉さんに抱かれて帰って来たけど、また、与吉さんが?」

千代と登与眼が合う。

登与、ムツとして眼をそらす。

千代「……そんなことはないね。そういえば、夕べから、清七の姿を見かけなかったが、まさか、清七と?! そんなことはないね、あんな馬鹿と。琴ー! 琴ー! 登与、向こうの方を捜してみよう、琴ー! 琴ー!」

千代、去る。

登与「清七と一緒に……まさか？」

と、千代の後を追う、登与。

清七、現れる。

清七、司山を睨むようにして、呟く、

「……お嬢さま」

漆黒の闇に溶ける、清七。

その清七を追うように現れる、いつかの釣り人……。

9 司山。

深い森のなか。淡い木漏れ日が揺れている。

そして、小川の前に——琴がいる。

塑像のようにじっと動こうともせず座り続ける、琴。

……いつしか、陽は傾き辺りは真紅の海。

その時、木立を割って数人の山賊どもが現れる。

ウシ「……あれ、この女まだいやがる」

シギ「本当だぜ」

カラ「ほれ見ろ、俺の勝ちだぜ」

シギ「畜生、ほれ」

と、シギ、小銭を投げる。

カラ、小銭を受け取ろうとするが手から滑り落ちる。

小銭は枯れ草の埋もれる緩やかな勾配をころころ転がる。

その小銭を目で追う琴と山賊。

やがて小銭は小川に「ポチャン」と落ちる。

カラ「ねえ、お嬢さん、いつまでここに居るんですかい」

先ほどから山賊たちの話しぶりやしぐさがやに芝居がかって
いる。

琴「……」

シギ「ふん、返事もしねえ」

ヤブ「やい、女……」

アジ「チーッと、話があるんだが」

ウシ「もう一遍、な」

シギ「命は取らねえとお頭が約束したんだ。その、お頭の前で踊つ
た、あの踊りをよ！」

ウシ「見てえんだ」

シギ「いいだろ、ほれ、腹が減ったろ、握り飯にヤマメ、食え！ 満
腹になったところで踊ってくれや」

琴、懐より財布を出し金を置くと、握り飯をムシヤリムシヤリ
と食べる。

カラ「……これだ」

一同、笑う。

ウシ「俺達とは、口は聞かねえとよ」

咽る、琴。

デモ、竹筒を琴に渡し水を飲ませる。

琴「(そっけなく) ありがとう！」

ヤブ「急に、刀を抜いて）やい、踊れ！ 踊らんか!!」

カラがヤブの前に出る。

カラ「おい、早くそいつをしまえッ……。ヤブ、俺の言う事が聞け
ねえのか！」

ヤブ「何だ偉そうに、女の前だと思つてカッコつけやがって……ろくに人も殺れねえくせしてよ」

カラ「何！（抜刀）」

ヤブ「カラ、俺とやるうってのかい」

アジ「止める、ヤブ！ カラ！」

と、アジ、二人の刀の間に割つて出る。

ヤブ「止めるなアジ、こいつは死にたがつてんだ」

アジ「止めるッ！」

アジの眼前にヤブとカラの剣が、ヌツと出る。

アジ「……俺を、巻き添えにするのだけは、止める！（と、逃げる）」

ヤブとカラの一瞬の斬り合い。

ヤブの刀が「ズブリ」とカラを突き刺す。

シギ「……野郎、とうとう殺つちまったな（抜刀）」

シギとヤブ、激しい死闘。

シギの胴をヤブの刀が切り裂く。

息絶える、シギ。

すでに、陽は沈み、蒼い月光がシギとカラの屍を照らし出す。

琴「（恐怖に震えながら）何てことを!!」

ヤブ「……うるせえっ！ お前が素直に踊つてりや、こんな殺生し

ねえ ですんだんだ!!」

琴「そんな……（泣く）」

ヤブ「……シギ!……カラ！（泣く）」

その時、森の奥より擦り切れた鎧に身を纏い、大きな包を携え

鼻歌まじりで胡散くさい侍が現れる。

巨漢で悪漢無頼な風貌だが眼の奥に誠実な炎が漂っている。

山賊の頭——羅生（五十三歳）。

ヤブ、羅生に気づき、何とも明るく、

「あっ、お頭！ お帰りなさい！」

羅生「おおっ、今、帰った……ほい、土産だ！」

と、包を掲げる。

ヤブ「……何ですか？」

羅生「人の首だ!!」

琴「ヒッ！」

琴、気絶。

羅生「あらっ?!」

羅生、鼻歌まじりで琴に近づくと、デモに、

「……俺、冗談で言ったんだよ」

デモ「……でもっ（不機嫌）」

羅生、萎れて（鼻歌を唄いながら）倒れている、シギとカラに

近づく。と、死んだはずの二人、ムックリと起き上がる。

羅生「冗談だったんだよな……!!」

二人「（明るく）はいっ!!」

檜皮葺きの大屋根に押し潰されそうな粗末な造りの山家。

板敷の間に、羅生が中央上座に座し、シギ、ヤブ、カラ、デモ、アジ、ウシが上手に、下手に琴がポツンと座っている。

羅生「何も、この腹の子の親父だと名乗り出たからって、取って食おうってんじやねえんだ。聞いての通り加賀屋の若旦那として迎えようとおっしゃっていなさるんだ。加賀屋といやあ、大店中の大店だあ、羨ましいぐれえだ！（と、一同を睨み）この色男。俺は、嘘は嫌えだ!! だから、侍やめて盗人になったんだ、山賊だと旗あ掲げたんだ！　こそこそ、おべんちやらなんか使つて世中生きたかねえ！」

羅生、満面の笑みを浮かべ、胡麻を播る真似。

羅生「『これは、これは徒目付様、おやつ、鬼だまりに埃が……、あらつ、草摺くさずりに泥が……まつ、鯉口に手垢が……。あ、これつ、頬にはくろ、は、取れません』」

羅生の恥も外聞も捨てた派手な胡麻播踊りが一瞬繰り広げられる。

そして、何事もなかったように、

「（琴に）あんた、分からねえのか、そりや、真暗闇で顔は無理だろうが、そのオ……肉付きとか。あのオ……匂いとか。肌触り……餅肌、鮫肌、脂性、毛が多い、少ない、まったくない。……ま、七月も前じゃ、忘れ……」

琴「覚えております……」

一同、身を乗り出す。

琴「何せ、あの様なことは初めてですので……肌のぬくもり……汗の匂い……荒い吐息……軀じゆうを這い回った、覺いぢかの様な唇」

山賊ども、互いの唇を見合う。

琴の表情は、恍惚としている。

琴「ふふふ、獣の様な、お人でした」

琴、自分の軀を愛しく抱く……。

羅生「獣？……野郎ども、立って歳の若けい順に一列に並べ!!」

ヤブ、カラ、シギ、アジ、ウシ、デモ一列に並ぶ。

羅生「さつ、お嬢様、吟味を……、前まえから順に後ろへ古くなっております」琴、あの時を思い出すように、一人一人、丹念に見て歩く。その眼は、まるで美術品でも観覧しているようだ。吟味が終わる。

黙然と立ち尽くす、琴。

羅生「……無理もねえ。もう一度、襲わせて確かめる訳にもいかねえし……。ここは、どうだい、一度、家にお帰りになって、赤子を生んで、その顔を見て、あつ、こいつは三毛だから乾物屋かんぶつやの子だとか、あつ、こいつはブチだから……」

カラ「お頭ー！　猫の子じゃねえんですよ」

羅生「分かってるよ（琴に、優しく）ねっ、皆の顔よく覚えておいてさ、またおいで（更に、優しく）ずっとここにいるからねえ」

琴「……死にます!」

羅生「(キッパリと) 駄目!!」

琴「帰れません!」

羅生「(キッパリと) 帰りなさい!!」

琴「父無子を生む訳にはいきません!」

羅生「(まるで、母親の様に) 生みなさい、子供は可愛いですよ……」

琴「生みません!」

羅生「(むきになって) 生むのです!」

琴「生みません!」

羅生「生みなさいてば!!」

琴「……生みたいけど」

羅生「(喜んで、その眼は、聖母のよう) ウーン!」

琴「死にます!」

羅生「おやっ?!」

琴「舌を噛みます」

羅生「そんなことしちゃ駄目! 痛いよっつ」

琴「痛くてもいいんです。死にます!!」

羅生、慌て、取り乱す。

羅生「(子どもにも) おい! 何、見てんだ。止めろ! 早く止めろ!!」

ヤブ「お頭、大丈夫、大丈夫」

羅生「何が、大丈夫だ」

シギ「噛まない、噛まない」

アジ「なかなかね」

ウシ「噛まないもんですよ」

カラ「噛むと言った奴に限って、噛んだためしがない」

ヤブ「大丈夫ですよ」

羅生「そうかね(一安心)」

デモ「……でも」

羅生「うっ?!」

琴「うーっ!」

琴、舌を噛み倒れ込む。

羅生「馬鹿野郎!!」

羅生、狂った様に、山賊どもを殴り倒し、投げ飛ばす。

ヤブ、カラ、シギ、アジ、ウシが、枯れ葉の様に散り伏す。

そこへ、あの釣り人が、忽然と……何処からかわれ、何処へと去って行く。

羅生の怪訝な視線が、釣り人を追う。一瞬、間があつて、首を傾げる羅生。

さらさらと、降る雨。
山賊の山家の傍らに造られた、小さな、琴の庵。
庵といっても、粗末な板囲いに、破れ傘の屋根で雨を凌いでいるしまつ。

琴が、産着を縫っている……その顔は、母である。

羅生、シギ、ヤブ、カラ、アジ、ウシ、デモが山家の中から、
琴を優しく見守っている。

時々、大きなお腹を愛しく撫ぜる、琴。

琴、お腹が空いている仕種……。

羅生たち、オモチヤのように慌て、食べ物を探すと、ヤブに持たせる。

ヤブ、琴に近づき、仕草で……。

ヤブ「ほれ、食べなさい」

琴「(有難う……でも、お金がないの)」

と、空の財布を懐から取り出すと……握りつぶす。

ヤブ「(お金なんか、いらねえ)」

ヤブ、食べ物をむりやり琴に握らせ、雨のなかを、走って戻る。

琴、羅生たちに、深々と頭を下げる。

羅生たち、恐縮しながら、丁寧に頭を下げる。

琴、ゆつくりと立ち上がり、舞い出す。

絹のような雨に打たれ、お腹の大きな琴が、踊っている。

美しい……美しい。

朝靄が立ち籠める中、琴が、山賊どもの着物を洗濯している。

清七が、岩場に腰掛け、琴を見つめている。

川下には、あの釣り人が糸を垂れている。

琴「お前、よくここが分かったね……」

清七「分かったんじゃないくて、山路に迷ってウロウロしていたら、
怪しい奴だって、怪しい奴に捕まっちゃったんですよ。こんな
(凄いや顔をして)は、出てきませんでしたけどね、楽しみに
してたのに……。お嬢さま、逃げましょう！」

琴「逃げましょうって、お前、また道に迷うだけですよ、私は、
いや」

清七「迷う？ とんでもない！ 帰り道は、目の前にあるじゃない
ですか」

琴「目の前?!」

清七「(川に小石を投げ)これ、これですよ、この川」

琴「……?」

清七「この川、お嬢さま、久路川ですよ」

琴「(うれしそうに)久路川、この川が」

清七「ええ、ですから、この川沿いに歩いて行けば……」

琴「(川をジッと見て)お母様たち、お元気かしら」

清七「(他人ごとのように)さあ、どうですかね。(釣り人に)あの、
何処かで、お会いしませんでしたかね……」

釣り人「あつ、あのオ……」

清七「(釣り人を無視して)さつ、逃げましょう、お嬢さま！」

琴「帰れないわ」

清七「帰るんじゃないですよ……何処かで二人で暮らしましょう」

(琴の腹を見て) 三人で

釣り人、すつくと立ち上がる。

清七「(釣り人に) 何か？」

琴「お前と？ どうしてお前と私が暮らすんですか」

清七「(釣り人を、気にしながら) 山賊が、父親だなんて、その子が不憫です。ですから……その子の父親に私になります」

琴「……？」

釣り人、清七を睨む。

清七「(釣り人に) あの、何か？」

釣り人「……いえっ」

と、座り込む。

清七「それに、いつまでもこんなところにいて、殺されでもしたら」

琴「そんなことないわ」

清七「そんなことない訳ないでしょう。こんなにこき使われて……」

琴「別に、こき使われている訳ではありません。私から、頼んで、お仕事を頂いているのです。それに、いまではここが、私の家です。この子のお父様は、きつと、あの人たちの中におります。

(お腹の子に) ねっ。それに、あの山賊さんたちは、悪い人たちじゃないのよ、いわば、義賊ね」

清七「義賊?! その、義賊が、お嬢さまをこんな目にあわせたり、旅人の腕を、チョン斬ったり」

琴「ああっ、あの腕はね、多十郎という山賊さんの腕だったんだって、毒蛇に腕を噛まれてね、とっさにその腕を切り落として命が助かったんだって、でも、その後、毒蛇にオデコを咬まれて、とっさに首を切り落として、死んじゃったんだって」

清七「本当ですか？」

琴「本当ですか、俺は嘘は嫌いだ！」

清七「お嬢さん、山に来て変わりましたね」

琴「苦労したのよ」

そこへ、鼻歌を唄いながら、羅生、ヤブ、カラ、シギが出て来る。

羅生「(釣り人に) どうだい七吉さん、アタリは……」

七吉、何か言おうとするが、羅生、七吉を無視して、

「ああ、琴さん、あんまり無理しちゃいけないよ、ああ、清七さん(急に、釣り人に) どうだいアタリは、餌は、何付けてんだい(急に、清七に) どうだい暇だったら俺と碁でも打たねえか、どうも、子どもは相手にならねえ、俺より強くて、ハッハッハー。どうだい、七吉さん、俺と碁でも。琴さん(手を振る) ああっ、と、七吉に) 上の方がよく釣れるぜ。さあ、清七さん、ひと打ち。あれ、(七吉に) 俺、さっき餌のこと聞かなかったかなあ。(と、どうやら羅生は精神分裂症の気があるようだ) 教えておくが、餌つける暇があったら手掴みの方がいいぜ、ここら辺りの魚は、呑気なのがが多いから、火に焙られても釣られたことに気が付かねえんだ」

七吉「本当ですか？」

羅生「本当ですか?! 俺は、嘘は嫌れえだ!! (と、刀の柄に手を掛ける)」

カラ、頭を侮辱されたことで、軀が、ワナワナと震えている。

羅生「(今にも刀を抜きそうなカラを気にしながら) だがな、いま

の話は冗談、ハッハ……」

その時、カラの刀がキラリと光り、空を鳴らして七吉を袈裟懸けさがけけに斬り裂く。

七吉「うーっ！」

羅生、琴、清七、ヤブ、シギ、アジ、ウシ仰天。

七吉、虚空を掴み立ったまま、息絶えている。

羅生「(カラに)「冗談だって言ったろ！」

カラ「冗談?!」

カラ、一瞬、罪の深さにさいな苛まれ、刀を自分の手首に当てる。

羅生「やめろ、よせ！」

カラ「ううん(と、首を振り、手首に当てた刀を、引こうとする)」

一同「あーっ」

カラ、思い止まる。

羅生「……思い止まった」

又もや、カラ……。

一同「あーっ!!」

カラ、思い止まる。

羅生「思い止まった！」

カラ、意を決死、刀を引く。

一同「あーっ」

と、カラ……、

「冗談ですよ、竹光たけみつ」

羅生「(ホツとして)「冗談か、ハッハッハ……」

しかし、七吉は、斬られた格好のまま微動だにしない。

一同、驚愕。

羅生「(恐る恐る)七吉さくん、と、呼んでも返事がねえ。七吉さくん。と、再度呼んでも、なお返事がねえ」

一同「七吉さくん」

ヤブ「七吉さくん」

シギ「七吉さくん」

カラ「(気が動転)いち、に、さくん」

カラ、一同に頭を小突かれる。

その時、デモが碁盤を抱えて現れる。

デモ「どしたんですか？」

一同、七吉を指す。

デモ「(何のこだわりもなく)七吉さん！」

七吉「(我に返り)ヘイ！」

一同「ああっ!!」

(C・O)

○

(C・I)

羅生と清七の碁が始まっている。琴、ヤブ、カラ、シギ、アジ、ウシ、デモが二人の勝負を見守っている。

川下には、何事もなかったかのように、釣り人が静かに糸を垂れている。

羅生「……どうだい、清七さん番頭の仕事は」

清七「(釣り人を指し)誰ですか、あの人？」

羅生「(無視)いいな、堅気の仕事は、夜は夜で縄暖簾なわのれん、可愛い娘

相手に酒あおって、後は、ぐっすり高鼾だ」

清七「本当に、誰でしょうね？」

羅生「(無視) こっちとら、こんな家業だから、いつ貴崎の鉄砲隊が山狩りに来るかと夜もおちおち眠れねえ」

清七「その、貴崎の鉄砲隊の物見だったりして」

羅生「(理解できない) 物見ってナニ」

清七「問者！」

問者と聞いて、ヤブ、カラ、シギ、アジ、ウシ、デモが刀を抜き、釣り人を取囲む。その敏速な動き。

羅生「(鈍) 病人？」

デモ、羅生の頭を鋭く叩く。

羅生「(急変) 怪しい野郎だなあ！ どっから来たか聞いてみるか」

清七「そんなこと、正直に言いませんよ」

羅生「それもそうだな、じゃ、何処に帰るか聞いてみよう」

清七「同じじゃないですか。私に、任せてください」

清七、釣り人に近づき、

「ちよいと、お前さん！」

七吉「(ドスのきいた声で) ちよいと、お前さん!!」

清七「代わりましょう」

羅生「どうした」

清七「怖い！」

羅生「そんなことはねえ、こんな人当たりの好い人はいねんだ、ねえ七吉さん」

七吉「(一遍し、碎け) へい、お頭、何か御用で、あつしに出来る事がありましたら、何でも言ってください、随分お世話になりますから、お頭が、右むけっっちゃ右きますし、あっち行って寝ろって言や、あっち行って寝ますし、左むけっっちゃ左向きますし、こ樹のぼって、斜め上向いて、眼剥いて……」

羅生「なっ、こういうお人だ。どっち向かして、何処寝かす」

清七「何いってんですか。ちよいと七吉さん、お前さんに聞きてえ事があるんだが」

と、清七、勢い込んで七吉に立ち向かうが、七吉の眼力に気圧され目を逸らす。

七吉「ほら、そうやって眼をそらす！ 人と話す時は人の眼をちらちらと見て！」

清七、おどおどして爪を噛む。

七吉「ほら、そうやって爪を噛む、爪はきれいに切るときなさい、夜爪を切っちゃいけないよ、世を詰めると言ってるね、長生き出来ないう。それからね、夜、口笛を吹くと蛇が出るよっ！」

清七「(羅生に) かわりましょう。汚くて、臭くて、怖い！」

羅生「どうしたんだい、七吉さん」

七吉「へい、お頭、何処行って、どっち向いて、どう寝やしよう」

羅生「そうだな……。いや、そんな事より、この山になんか用かい、釣りだけかい？」

七吉「へい、お頭が、用かいて言やあ用作っちゃいますし、釣りだけかいて言やあ、後二、三匹釣ったら、家に帰って丹後縮綿の蒲団敷いて、灘の生一本を寝酒にでもして、近所の尾の長いキジトラの猫抱いて寝ちゃいますし、ニヤッオ」

羅生「いや、そんなに急いで家に帰って……。えーっ(思い出せない)」

ヤブ 『丹後縮綿の蒲団』
羅生 『丹後縮綿の蒲団敷いて』……ううーっ」
清七 『灘の生一本寝酒にでもして』
羅生 『灘の生一本寝酒にでもして』……ややーっ」
ウシ 『近所の尾の長い』
羅生 『近所の尾の長い……』
カラ 『キジトラの猫』
羅生 『キジトラの猫……』
シギ 『抱いて』
羅生 『抱いて』
アジ 『寝ちゃう』
羅生 『寝ちゃう……』
デモ 『ニャーオ』
羅生 『ニャーオ』。しなくていいんだが、二、三答えてくれねえか……』
七吉 『へい』
羅生 (威厳に満ちて) 正直に答えてくれよ。俺は嘘は嫌いだ……。
先ずひと一つ、鼻から入れて耳から出すもの、なーに」
カラ 『お頭、頓智やつてんじやねんですよ』
羅生 『今のは、なーし……』
七吉、荷物を纏めると、羅生に深々と頭を下げ、素早く立ち去る。
羅生 「あれ？ 嫌われたかな……?!」
一同、山を下る七吉の背を見送る。
清七 「うーん」
一同、清七に顔を向ける。
羅生 「……どうしたい」
清七 「……昔、何処かであの人と」

13

激しいMと共に、清七の回想。
路地裏に幼い清七がいる。

清七、風呂敷包を大事そうに抱えて、来る。

悪童が数人現れ、声を揃え「やーい、貰いっ子オー」と、言
つて立ち去る。清七、心に大打撃をうけ、風呂敷包を落とす。

「ガチャーン」と、音を立てる風呂敷の中身。

清七、風呂敷を恐る恐る開ける。粉々に砕けた壺が出てくる。
泣きながら、直そうと試みるが、無駄である。

悪童ら、又もや現れ、更に、清七に石を投げる。必死に避ける、
清七石つぶてを全て交わした清七だが、丸太ん棒を手に物陰か
ら現れた餓鬼大将に、脳天を叩かれて気絶する。悪童ら、寄つ
て集って清七を殴り、立ち去る。

夕暮れの路地裏。

鼻血、青痣あおあざの清七が、息を吹きかえす。破れ、汚れた着物を寂
しそうにはたく、清七……。

が、又もや悪童らの殺気。気絶の真似をする、清七。

だが、悪童らの、執拗ないじめが続く。

倒れた清七の顔に、濡れ手拭を被せる、悪童ら。もがき苦しむ
清七。

悪童ら、わいわいと、はしやぎ消え去る。断末魔の痙攣を起こ

す、清七。
その時、縞しまの合羽かっぱに三度笠の旅人が現れ、清七に気づき、濡れ手拭いを取ってやる。呆然自失の清七に、旅人が、吹いて手渡す、赫あかいい風車かざぐるま……。その一本独鈷いっぽんどっこの旅鳥は、若き日の七吉、あの釣り人である。風のように立ち去る旅人の背を、いつまでも見送る、清七。

14 もとの、谷川。

清七の話に、眼を潤うるませている、一同。

羅生「そうかい、お前、貰もらいっ子だったのか……」

15 哀しいMと共に、羅生の回想。

満天の星空。

うらぶれた長屋の路地。

若き羅生と一人息子、弥之丞やのすけ（八歳）がいる。

羅生「弥之丞、許してくれ。私は、本当は弱い男なんだ」

弥之丞「父上！」

羅生「弥之丞、ご免ね、今日は泣いていいね」

弥之丞「父上！」

羅生「弥之丞、私のような男になっちゃ駄目だよ……！」

弥之丞「父上……」

羅生「（夜空を見上げ）弥之丞、見てごらん……きれいな星空」

弥之丞「本当ですね。父上、人は死ぬとお星さまになるって、本当ですか」

羅生「……誰が言ったんだい、そんな事」

弥之丞「裏の裏の留とめさん」

羅生「（裏の別棟長屋に向かつて）こらっ留！ 馬鹿かお前メエ!!」

弥之丞「えっ、何か?！」

羅生「いいや、大工の留さんのおっしゃった通り、あの夜空に煌きらめくお星さまになれるのですよ」

弥之丞「父上、私は、あのお星さまになりたい！」

羅生「弥之丞!!」

弥之丞「父上!!」

羅生「そうだ、私はもう生きる事に自信が持てないのだよ。弥之丞、星になろう……この井戸に飛び込んで」

弥之丞「でも、この井戸で死んだら、長屋の人が困るんじゃない」

羅生「自分が死ぬのに、あとの人の事なんか心配してられないよ!」

弥之丞「でも、長屋の人達に後で私がいる言われます」

羅生「何を言うんだ、弥之丞?! お前も一緒に飛び込むんだよ」

弥之丞「やめました。よく考えてみますと、私はまだ八つです。これからです。もったいないと思いました」

羅生「私だって、まだ四十二だよ!」

弥之丞「厄年です……」

羅生「あっ?!」

弥之丞あっ、流れ星!」

羅生、弥之丞、夜空に手を合わせ祈る。

羅生「逃げた妻が女房が帰って来ますように 南無 菩薩 大明神 釈迦如来に八百万の神々よ。南無妙法蓮華経、南無阿弥陀仏、

大工の留さん！」

羅生、ゴマを焚く勢い。

弥之丞「父ちゃんが星になりますように！」

羅生「何か言ったか？」

弥之丞「いいえ」

羅生「弥之丞、父が悪かった。私も生きるよ！」

弥之丞「父上！ お星さまって素晴らしいと思います。私のお友達に、お星さまになった父親はまだ誰もいません。友達に自慢出来ませう」

羅生「そうだ、弥之丞、私の御同役にもね、子供がお星さまになった人なんてだあれもないんだよ、井戸に飛び込みたくないのなら、父が、この手で、お前を、お星さまに、して、あげる（と、弥之丞の首を絞める）」

弥之丞「ウゝゝウ、ウゝゝウ、お星さまって、やーっ、苦しかったんですねー」

弥之丞、絶命。

羅生、号泣。

と、弥之丞、むっくり起き上がり、背後から羅生に近づき両手で優しく羅生の眼を覆う……驚く、羅生。

二人、堅く抱き合う。

羅生、弥之丞、晴れ晴れとした顔で夜空を仰ぐ。

弥之丞、星を指さす。

羅生も星を指さす……それぞれ違う星。

猜疑の眼差しで見つめ合う、親子。

羅生、頬笑みを我が子に送り、あらためて星を指さす。

弥之丞も、星を指す。……また、それぞれ違う星。

意見の合わない親子……。

二人、同時に首を絞め合う……。

16 もとの、谷川。

泣いている、羅生。

貫い泣きの、清七。

そこへ、英気颯爽とした旅姿の若者が現れる——弥之丞（十九歳）。

弥之丞「ただいま！」

羅生「……あつ?!」

弥之丞「ただいま!!」

羅生「弥之丞!! 帰って来たか……いま、お前の話をしていたんだよ」

清七「いま、お話にあった弥之丞さん……まあー随分大きくなって」
弥之丞「（背伸びをして）大きいでしょう」

琴と弥之丞の眼が合う。

見つめ合う二人。

琴と弥之丞を、あの時と似た、燃えるような夕陽が包み込んで行く。

17 琴のイメージ。

○美しい花嫁御寮が、馬に揺られて行く……琴である。

○三、三、九度を交わす、琴と弥之丞。

○幸福で、睦ましい琴と弥之丞の新婚生活が始まる。

清らかな光が押し寄せる朝の台所……。忙しく朝餉の支度をする、琴。

○二人きりの楽しい夕餉。

弥之丞がおかずを箸で琴の口に含ませる。顔を赤らめる、琴。

○臨月の琴。

お腹に耳を当てる、弥之丞。胎児が、弥之丞を蹴る。

○赤子をあやす、琴と弥之丞。

○弥之丞が、成長した息子と川原で魚を釣っている。

琴が、昼のお弁当を手に現れる。幸福な一族の風景。

——幾星霜を風のように送る、琴と弥之丞。

○老いた、琴と弥之丞が、桜の舞う路を手を携えて歩いている。

18 腹ぼて三人。

山賊たちの山家。

ヤブ、カラ、シギが、今にも弥之丞に飛び掛かろうとする羅生を、押さえ込んでいる。

上手に、弥之丞、その両脇に、臨月のお腹を抱えた綾と鈴が、座っている。鈴は弥之丞に寄り添っている。

下手に、琴。

一同、弥之丞を睨んでいる。

弥之丞「父上、私ではございません！」

羅生「うん……、しかし、お前は……」

弥之丞「それは、私は女に手が早い」

羅生「それみろ！」

弥之丞「が、闇に隠れて女を襲うなど……」

羅生「やりかねん！ どうしてくれよう!!」

と、羅生が天中に拳を振り翳した時……不意に両手を床につく、綾。

綾「(愛らしく)アヤです」

羅生「あや？」

牧歌的というか、一点の曇りも感じさせることのない、健康美そのものの武家娘——綾(十八歳)。

鈴「あたい、鈴」

鈴(二十歳)綾とは対象的で、やくざな身のこなしが、この女の遍歴を物語っている、妖艶である。

綾「ふふふ、まるで獣のようでした」

羅生「獣?!」

綾「狼。食べられてしまうのかと思いました」

鈴「あたいもさ、いまだに乳房に歯形があるよ、痛かったーっ。お返しに、ケツペタ食いついてやったけどね……」

綾「あれは、あなたの歯形だったのですか……驚きました。私、燃えますと前後不覚に陥ることが多々ありますので、私が、あのようにはしたくない真似をと」

鈴「……それはご心配をお掛けしまして、あたい、はしたない女なので、はしたない真似は、ねえ弥あさん」

羅生「弥あさん……?」

弥之丞「(嬉しそうに)ええっ、弥あさん」

羅生「ヤアさん(ヤクザ)?」

綾・鈴「ううん、弥さん……」

鈴「ねえ、お父様、あたい、はしたない女なんですよ、貴崎城下

の飯盛り女……でもね惚れちゃったんですよこの人に、また泣かされると思ったんだけど、この人なら泣かされてもいいやつだね」

羅生、鈴の色気に気圧けおされたのか、目が虚ろ、

「いいやつて〜」

鈴 「そしたら、油断しちゃったのか、これ（お腹を撫でる）……でも弥あさん、『いいよ、ついてきあ〜って』」

羅生 「……きあ〜って」

鈴 「お父様、いい倅さんですねえ……」

鈴の色香にどろどろ溶けそうな、羅生、

「まあ、普段から女は泣かしちゃいか〜んと、言ってるうち！
ねえ、弥あさん（と、大いに照れる）」

鈴 「お父様、この子、立派に生んでみせますわ、あたい、子供生むの初めてなんで少し恐いけど」

羅生 「……恐いの〜」

鈴 「……まあ、綾様からいろいろ教わって、綾さまは、今度で七人目ですものねえ」

羅生 「七人?!」

鈴 「お父様は、一度に八人の孫がお出来になられるのよ」

羅生 「八人!!（口から泡を噴き倒れそうになる）」

綾 「先の夫は、柿矢川かきやかわの戦で……。弥之丞様のごことは、我が父上様もお許しになり、田所家の婿養子として……」

弥之丞「役職にも付ける。ま、山賊の倅としては大出世だな。父上！」

羅生 「何じゃ！」

弥之丞「とは違って、俺は、要領がいいからな、何とかやっていけるさ」

鈴 「あたい、弥あさんの為なら何でもしますよ。たとえ日陰の身でもねえ」

弥之丞「すまないね」

綾 「私は、弥之丞様に命を掛けております」

弥之丞「ありがとうございます……。父上、ご安心下さい」

羅生 「……」

琴 「（突然）弥之丞様、失礼なことをお聞きしますが、お背中に刀傷はございませんか……」
一同、琴を注視する。

弥之丞「父上」

羅生「うっ」

弥之丞「失礼な娘ですね」

羅生「ううっ」

琴 「……先日、夢で、あの夜の……うなされ現に戻る寸前、その男の背中に刀傷が……」

鈴 「夢で……?」

羅生 「……琴さん、弥之丞の背中には確かに刀傷があります」

琴 「では?!」

羅生 「じゃが琴さん、その刀傷はどのような」

琴 「はい、確か、右肩から袈裟懸けに……」

鈴 「まあ、孫が九人」

綾 「弥之丞さま！」

鈴と綾、弥之丞を睨む。

羅生「……うん……それから」
琴「それから？」

羅生「まつ、見てくれ。野郎ども！」
ヤブ、カラ、シギ、アジ、ウシが「へい！」と背中を向け、上半身を脱ぐ。

その背中には、袈裟懸けやら、さまざまな刀傷。

羅生「この通りだ、まあ、山賊などというなりわいをしておると、刀傷、槍傷が絶えんので……儂も、ほらっ!!」
と、羅生、脱ぐ。

その背中は、傷一つない、色白な餅肌。

琴、眼を凝らして羅生の背中を見つめ、傷跡を丹念に探すのがなかなか見つからない。

ウシ「眼を擦り、まなこを見開き、羅生の傷を捜しあて……ここです」

と、指す。

羅生の脇腹に、蚊に刺されたほどの、傷。

羅生「まつ、この有り様だ……その刀傷の夢は、当てにはならんな」
そこへ、デモが慌ただしく走り込んで来る。

デモ「お頭!!」

羅生「落ち着け！」

デモ「(落ち着いて) 大変です」

羅生「どうした」

デモ、羅生に耳打ち。

羅生「何っ、清七が?!」

デモ、琴に気づかさまいと、羅生を黙らせるように、平手打ち。

羅生「どうした？」

デモ、また羅生に耳打ち。

羅生「いなくなった?!」

デモ、羅生のみぞおちを殴る。

羅生「……でっ!!」

デモ、またもや羅生に耳打ち。

羅生「盗まれた?!」

デモ、羅生の腕を捻り上げる。

羅生「何を？」

デモ、耳打ち。

羅生「わしらの金、全部?!」

デモ、羅生を羽交い締め。

羅生「(琴に心配を掛けまいと、愛嬌よく手を振り) 琴さーん」

デモ、羅生をめちゃくちゃにシゴク。

羅生「(くちやくちやになりながら) 琴さん、まつ、心配するな」

羅生、反撃にでる。が、デモに軽くかわされ、ぼろぼろにされる。

デモ去る。

羅生、何とか立っている。

羅生「琴さん、心配するな。儂のことも(山賊たち、大笑い)(デモに) おい、もうちょっと詳しく、優しく聞かせろ(デモを追う)」

琴、驚いて立つが、目眩を起こし、倒れ込む。

山賊たち「あーっ」

袖で羅生の声『清七が?!』

一発殴られる音。
眼に青痣をつくり、フラフラと羅生が出て来る。琴が倒れているのを見て、
「……おおっ、寝たか……（と安心して、倒れる）」

19

花一輪。

同、山家の別室。

琴が、寝込んでいる。

鈴が、酒を汲みながら、琴の看護をしている。

ふたりをあたたく包む燭台の灯。

琴 「……すみません」

鈴 「いいんだよ、何か食べたい物はないかい……。別に遠慮することはないんだよ、あたいでよかつたら何でも言っておくれよ……女郎あがりだけだね」

琴 「そんな……ありがとうございます。それより、鈴さんこそ、あまりお酒を……」

鈴 「こりゃあ、あたいの薬だよ……あのさ……忘れなよ」

琴 「えっ」

鈴 「……男さ」

琴 「（何か言いかける）」

鈴 「いいじゃないか。ほら（と、お腹に手を当てて）ねっ、あたいたちには、こんなお宝さまがあるんだ。可愛いつてさ。夕べは、弥之丞さんや、お父さんの前だからあんなこと言ったけど、男なんて……あんた、男捜し当てたとしてもさ、だから何なんだい、泣かされるのがおちだよ。あたいは嫌だね。実のところ、妾でほつとしてんのさ、本気になれないんだよ……もう泣くのは嫌。これからは、この子と笑って暮すさ……仕合わせってこんなもんだったんだね」

そこへ、綾、可憐な花を、一輪、手にして現れる。

鈴 「……これはこれは、本妻さま」

綾 「これはこれは、お妾さま。……琴さん、ご気分は。小川のほとりに、ほら、こんな奇麗な花が」

鈴、ふらつく足で花から逃げるように立つ。

綾 「……（琴に）鈴さんは、花がお嫌いな」

琴、不思議そうに鈴を見る。

鈴 「……ふん、生まれてこの方、花が奇麗だなんて、一度も思っ てみたこともないね」

綾 「……花は、ひとの心を和ましてくれますわ」

鈴 「……心が和む？ なんだいそりや、そんなもの、見たことも、 食べたこともないね」

綾 「食べるものじゃ……」

鈴 「じゃ、あたいには、関係のないもんさ（酒を呷り、遠くを見る ような眼で）……生きることで精一杯だったよ……琴さん、 あたいには、可愛い弟がひとりいたんだよ。二親の顔も知らない、 たったふたりっきりの姉弟でね。ひもじかった……弟がね 『姉ちゃん花は食べられないの』って、そうよね、だって、あんなに美味しそうに咲いてるんだもんね」

綾 「美味しそう？」

鈴 「いつだったか忘れたけど……弟、花畑で死んでたの……口の

中に真赤な花がいっぱい。食べたのよあの子……あたいが悪いんだ、早いとこ身売りでもしてりや、あの子を死なせずにすんだのに……腹いっぱいまんま食べさせてやりたかった……花なんか食えやしないよ……花なんか食えやしないさ……」

琴 「鈴さん」

鈴 「……今、あたいには、この子がいて、この子には、あたいがいるんだ（声が滲んでくる）もう、ひとりじゃ……もう、ひとりじゃないんだ」

その時、山賊たちの歌声が聞こえてくる。

鈴 「何しているんだろ、あの人たち……」

鈴、山賊たちの処へと向かう。

鈴と入れ違いに、弥之介が来る。

弥之丞、鈴が去った方角に視線を走らせ、

「鈴ッ、鈴ッ……（綾に）どうしたんだ」

綾 「花を一輪摘んで、琴さんに……」

弥之介 「花ッ……鈴のことで話しておきたいことが……」

綾 「聞きましたッ、花は食べられないから嫌いだそうで……」

弥之介 「綾ッ」

綾 「いったい私が鈴さんに何をしてさしあげればよいのですか……」

：不幸な育ちを、弟さまの死を嘆いてあげると……」

弥之介 「どうしてお前の言葉にはいちいち刺があるんだ！」

綾 「人は……人それぞれの境遇で生まれるのは当たり前……それをいつ迄もひきずって……鈴さんが男ならひっぱたいてやる場所です！ あなたもそうです。偉くなりたいのなら偉くなれるように努力なさい……方法はいくらでもあのです……私の言葉の刺は、あなたへ愛です」

その時、羅生が息を切らして飛び込んで来て、

「弥之介、大変だッ、鈴さんが倒れたッ」

20 花のない墓。

同、山家の別室。

琴が、寝ている。

開け放たれた薨戸しなみどの向うに、夕日に燃える山並。

弥之丞、椀を手に、来る。

弥之丞 「……少したべないと死じまうぞ」

琴 「働かざる者食うべからず」

弥之丞 「何言ってるんだ、ほら、お粥だ」

弥之丞、粥をすくい木匙さじを琴の口へ持っていく。

琴 「……おいしい」

弥之丞 「なあ、食べなきゃ」

琴 「……鈴さんは」

弥之丞 「ああ……花のない墓って……淋しいな」

琴 「……」

弥之丞 「俺、明日、山をおりる」

琴 「……そう」

弥之丞 「旦那、見つかるといいな」

琴 「……」

21 貰いっ子。

或る、旅籠の一室。

清七と緋の襦袢姿の登与がいる。

登与「お前から便りを貰ったときは、驚いたよ。あたしやね、お前
といつかこうなると思ってたんだ」

清七「俺も、そう思ってたぜ」

登与「今まで、何処にいたんだい」

清七「あっちこっちさ……」

登与「琴はどうしたんだい」

○

——下手に琴が浮かび上がる——

つかやま

司山——鈴の墓の前で手を合わせている、琴。

○

登与「一緒じゃなかったのかい……。まあいいさ、こうしてあたし
を呼んでくれたんだ。(外を見て)おや、また雨が降ってきた
ねえ」

○

司山——雨に打たれる琴に、デモが傘を差す。

○

清七、ごろりと横になる。

登与「……どうしたんだい」

清七「二日酔いだ」

登与「……風邪ひくよ」

○

司山——琴が、雨のなかに消えてゆく。

○

清七「大丈夫だよ……それより、酒、買ってきてくれねえか」

登与「……およしよ、身体にわるいよ」

清七「承知で飲むんだよ……(指を折る)」

登与「何数えてんだい……」

清七「何でもねえよ」

登与「……ヘン！ 知ってるよ。琴の腹の子の月、数えてんだろ」

清七「……」

登与「もうそろそろだよ……生きてりゃの話だけどね。ちよいと、

お前、琴の居所知ってるんだろ！」

清七「知らねえよ……」

登与「知らなくてさ……知ってるよ……二の蔵の壁の片隅にさ、お
前、子供の頃いたずら書きしたろ……相合傘描いてその下に、

琴、清七と……」

清七「……」

登与「それから、お前が消えたあの夜に見つけたんだけどね、相合傘の下に、確りとした字で……男なら琴久……女なら、琴路……お前の子だったんだね！ すっかり騙されてたよ、あたしもお母様も、それに、琴!!」

清七「うるせえ！」

登与「おや、お喋りのお前から、うるせえ呼びわりはないだろ」

清七「黙ってる!!」

登与「……琴久に、琴路か……いい名だね、琴は、琴の琴、琴久の久、琴路の路は、久路川からとったんだろ……子供の頃からよく、お前たちふたりして久路川で遊んでたものねえ……仲良く、それとも、お前、知ってたのかい」

清七「……何を」

登与「久路川は、お前が……拾われた場所だよ！」

清七「何っ?!」

登与「久路川の川原で、夜鷹のおっ母さんに抱かれ……」

清七「夜鷹のおっ母あ?!」

登与「〃お祖父様が雨上がり、土手から滑って泥だらけ〃お前も、夜鷹も泥だらけ、久路川に飛び込もうとしたお前たちを助け、聞いた身の上話に心が打たれたんだろ。お母様の反対を押し切って、お前を家に引き取ったんだい。可笑しかったよ、お祖父様もお前も、お前のおふくろも……三人泥人形のように泥だらけ……その格好たら……お母様たら、お腹を抱えて、ハハハハ（急に笑いを止め）そしたら、琴……水桶にいっぱい水汲んで来てね、お前の顔を洗いだすんだよ……『かわいichょう、かわいichょう』って言ってね」

清七「……琴！」

登与「……お前のおふくろ、泣いてたよ……涙で顔の泥が……」

清七「おふくろ……!!」

登与「奇麗な女だった」

清七「……」

登与「……何処かへ行ったよ」

清七「……」

登与「お前の為に消えたんだよ」

清七「おっ母ア……」

登与「お前、気がつかなかったかい。二の蔵の壁の、そう、お前の描いた相合傘の下辺りに、申し訳なさそうな小さな字で」
その時、傘を差した七吉が現れ、四つ目垣の陰に隠れる。

清七・七吉「……しあわせに〃」

登与「……そう」

清七「……あれ、おっ母アが書いたのか……ガキの頃から見て知ってた……誰が書いたのか、優しい字で〃しあわせに〃って、おっ母ア！」

七吉「……と、おっ父オ」

清七「おっ母アの字だったのか」

七吉「おっ父オの字です。お前のおっ母さんは、字なんか書けませんでした……だから私が……いや、私とお清で一本の筆をふたりで握り〃しあわせに〃って」

清七「おっ母ア！」

七吉「と、おっ父オ！」

清七「俺ら、寂しくなると、よくあそこへ行ってあの字、見てた。消えかけると、また、その上から筆でなぞって……」

清七・七吉「ッしあわせに！」

清七「何処へ行ったんだろう……」

七吉「おっ父オはここですよ……」

清七「おっ母ア……」

七吉「おっ母アは……（言葉が詰まる）」

滝しぶきのような雨が、七吉の破れ傘を叩いている。

七吉「……みんな私が悪いんです。お前とお清をほったらかして飲む、打つ、買うの三道楽、あんな、あんな……（思わず、にっこり）あんな楽しい事はなかったです。（真顔になり）乞食同然で家に帰ったら、お前がいない、お清がいない。捜して、捜して、加賀屋さんでふたりを見つけた時は、（泣く）嬉しくって、嬉しくって（号泣）アアッ、ウウウブウグーグググー！！」

清七「？　なんでえ！　ひきつけ起こしてる犬でも外に居るのか、やけにうるせえが」

登与、外を見る。

身を伏せる、七吉。

登与「誰も居ないさ、雨だけさ……」

清七「雨……もし、おっ母アが不幸つづきで、こんな冷てえ雨に当たっていなけりやいいが……」

七吉「おっ父オは、その冷たい雨に……」

清七「何処にいるんだ……」

七吉「おっ父はここですよ！　いつもお前のそばにいました。或るときは、大和の葉売り、また或るときは、しがなシジミ——売り（と、シジミ売りの声色）」

清七「今夜のおかずはシジミにしてくれ」

登与「どうして？」

清七「何となく……逢いてえよ、おっ母ア……」

七吉「……その、お父っつあんより逢いてえおっ母さんは」

清七「おっ母ア——」

七吉「死にました」

清七「えッ?!」

登与「どうしたんだい」

清七「今、死んだって！」

登与「誰が？」

清七「おっ母アが……!」

登与「誰が?!」

清七「おっ母アが……」

登与「だから、誰が言ったんだい?!」

清七「えッ!」

登与「お前のおっ母さんが死んだって？」

清七「誰が？　誰だろう?!　でも、今、死んだって誰かが？」

登与、外を伺う。

登与「雨だけさ」

清七「……雨だけか」

七吉「雨と、お父っあんもいますよ……お前の仕合わせだけを祈って。お清は、お前と別れて一月とたたなかつた。流行り病でボ

ツクリ。そう、あの日もこんな冷たい雨が降っていました。私は淋しくて、お前の顔が見たくて、加賀屋の旦那との約束も忘れて、こっそりお前に逢いに行きました。そしたら、おまえ〃麻疹〃で……熱にうなされ、うわ言で……おっ母ちゃん〃

清七「おっ母ア！」

七吉「おっ母ちゃん！」

清七「おっ母ア！」

七吉「何日も、四つ目垣の陰で、雨に打たれ、風にさらされ、心配していたお父ちゃんの名は一度も呼ばなかった……」

清七「おっ母アー！」

七吉「オマー!! お前は、おっ父オとおっ母で作ったんだぞ! おっ母アひとりじゃ出来ねえんだ、この、世間知らず!! おっ母アの腹の中で肥え過ぎやがって、いくらお清がふんばってもヒリ出てこねえ、俺は、三日三晩、一睡もしねえで唸るお清の腹さすってたんだ。オギャーと生まれりや一貫目もありやがって、お清はぶっ壊れちまって寝ついちまうわ、おまけに乳が出ねえときた。(七吉の喋りが一瞬歌舞伎口調になる) 如月雪きげいぎゆきの舞散る中を……」

はらはらと黒い空から雪が散る。

七吉「腹を空かしたお前の為に、山羊の乳でも買い求めようと、夜ついで十里の路を駆け通したこともあらあ。立った、歩いた、歯が生えた、泣いちゃいねえか、喧嘩しちゃいねえか、近所のガキどもと楽しく遊んでいるだろうか、帰りの土産に何買おうかと……」

○

回想。

立ち並ぶ出店。

祭りの雑踏のなかを、七吉が歩いている。

七吉、足を止め、清七の土産にと赫い風車を買う。

○

七吉「お父つつあんというものはなあ……(ぐつと、涙をこらえるが、思わず) 清七!!」

清七「はーい。誰か俺を呼んでる?!

と、清七、障子戸を開ける。

目と目が合う、父と子。

清七「(見つめて) 誰だお前は?」

七吉「えっ、いえっ、通りがかりの者で」

清七「通りがかりじゃねえ、通り止まってたみてえじゃねえか、何だい、何か用か……この雨ん中?」

七吉「……この、雨の中」

じつと清七を見つめる、七吉。

七吉、懐から赫い風車を出し、清七に手渡す。

清七、風車を吹く。

くるくると回る風車。

清七、思い出す。

清七「あれっ、お前あん時の……?!」

七吉「い、いえ……。あつ、そうだ、貴崎きざきの鉄砲隊が司山の山賊を……」

清七「えっ?!」

七吉「山狩りするとか、確かあんたの（小指を立て）これが、あの山に」

清七「琴！」

清七、雨のなかを飛び出す。@

登与、清七を追って、清七にむしやぶりつく、

「何処行くんだよ！ 何処行くんだよ！ 何処行くんだよ！」

清七「……離せ!!」

と、登与を突き飛ばし、走る、清七。

雨のなかを転げる登与。

登与「くそーつ、夜鷹の子!! 何だい、何だい、琴だけじゃないんだ。あたかも、泥だらけのお前の身体を洗ってやったんだ。あたいは、お前が好きなんだよ！」

破れ傘を片手に、懐手をした七吉が、大見得を切り、

「雨のおかげで、俺らの涙もわからなかったらしいぜ……」

と、歌舞伎口調。

「チョン！」と、柝の音。

激しさを増す、雨。

雨にうつ伏す登与に破れ傘を差す、七吉。

眼と眼を合わず、登与と七吉。

22

司山、山賊の山家。

眠る琴を見守る、ヤブ、カラ、シギ、アジ、ウシ、デモ。

羅生、来る。

羅生「どうだ……何だ、食べさせてねえのか」

デモ「デモ、頭……食べさせると……踊り出すんで」

カラ「この熱で……この身体で」

シギ「少しおかしくなっちゃったんじゃないんですか、変ですよ、鈴さんが死んでから」

ウシ「……今朝なんか半時も、鈴さんの墓の前で」

羅生「踊ってたんか……!」

アジ「いくら止めてもやめねえんで（泣いている）」

ヤブ「頭かしら、確か、倉追くらおいの加賀屋って言ってましたよね」

羅生「ああ……」

ヤブ「連れてってあげやしようや」

羅生「しかし、亭主が見つからなけりや、山は下りねえだろ」

シギ「……だから、嘘ついて」

羅生「嘘?!」

ヤブ「ええ、亭主が見つかったって」

羅生「俺ら、嘘は嫌いだ！」

シギ「身の丈は？」

羅生「六尺（と、背伸び）」

カラ「六尺？」

羅生「（二元に戻り）より、ちよと欠ける」

アジ「力は？」

羅生「ない」

ウシ「色男！」

羅生「ではない！」

デモ「正直者！」

カラ「でも、嘘つかねえと……このままでと……死じまいますよ！」
ウシ「(狂気の如く)やーい、嘘つかねえ人殺し!! やーい、嘘つか
ねえ人殺し!!」

羅生たち、ウシの狂乱の態におののき、逃げ回り一塊になり、
震え、抱き合う。

ウシ、長い吐息を吐くと静まる。

羅生、怖々と、

「……お前、何か拾って食ったか……(仕方なく)じゃ、誰が亭
主になるんだ」

デモ「そうだ、クジビキで決めましょう」

羅生「お、いい考えじゃねえか」

デモ、軒の茅を箒り、手に握る。

デモ「一番ながいのを引いたのが、亭主」

羅生「誰から引くんだ」

ウシ「そりやお頭から」

羅生「俺から？」

カラ「一番風呂だって、お頭からじゃねえですか」

羅生「そりやそうだ。一番風呂の、水風呂だア……」

ウシ「一番先に逃げるのもお頭」

羅生「ハハハ、お前よく見てるな」

シギ「捕まって、一番刑の重いのもお頭ですからね」

羅生「ハハハ、笑えねえ(クジを選ぶ)これか」

ヤブ「当たるよ、お頭これは当たるよ」

羅生「こりや、お前のぶんだ」

羅生、引く、短い(ハズレ)。

羅生「ハハハ、よかつたな、俺が引いたんだよ(また、選ぶ)これ
か」

カラ、つい、気安く羅生の頭に手を置いてしまう。

羅生「(シギに)こりや、お前の代わりに引いてやろうじゃねえか」

緊張する、カラ。

引く、羅生。短い。

ほっとする、カラ。

羅生「ハハハ、よかつたな俺が引いたんだぞ(選ぶ)これだ!こり
や俺の分だ(引く)おや……あ……あ……つ。長えな(当
たり)……でも歳の差がありますやしねえか」

ウシ「いいじゃねえですか、愛がありや年寄りだって」

羅生「そりやそうだな……」

一同、琴に近づく。

羅生の身体が硬直している。

カラ「お頭! 硬い、硬い」

羅生「硬えか……」

アジ「お頭、深呼吸しましょう」

一同、深呼吸。

羅生「苦しい」

シギ「お頭、吸ったら吐かなきゃ」

羅生、そうだそうだと言うように、ニコニコしながら、息を吐
く。が、

羅生「……苦しい」

ウシ「吐いたら吸わなきゃ」
デモ「全く、世話がやける」

羅生「何を言やいんだ」
ウシ「お頭、何も考えてねえんですか」

シギ『琴さん、身体の具合いどうですか、実は話したい事があるんだ。このまま黙っていると男が立たねえ、はっきり言うが、その腹の子の親は俺だ』

羅生「(ぶつぶつと)『琴さん、身体のケツは何処ですか、実は、鼻がかゆいんだ、かゆいときは掻いちや駄目、張り切って言うが、その腹の鱈子たらこは俺が食う』ハハハ、あつてるか(泣き出しそう)？(怒るように)半分にしろ！」

カラ「鱈子ですか」
カラ、一同に睨まれる。

シギ『その腹の子の親は俺だ』

羅生「半分か、本当に半分か？前のを言ってみろ」

シギ、元のを言う。羅生、その言葉の長さを手を広げ測る。

羅生「半分だな、よし！(と、琴に歩みかけて)……忘れた……稽古しよう」

デモを琴の代役にして。

羅生『琴さん、その腹の子の親は、俺だ』

デモ『えっ！ お頭が?!』

羅生「出来るじゃねえか」

と、得意げに歩き出すと……。

カラ「半分ですからね」

羅生、記憶力の弱さに、自信を失くして、うずくまってしまう。

シギ「増やしましょうか？」

羅生「増やすか？」

とは言うが、不安。

アジ「増やすんですか？」

ウシ「増やさなきゃ」

シギ『実を言うと』をつけましょう」

羅生「(シギに) お前やってみろ」

ヤブ『実を言うと、その腹の子の親は俺だ』

羅生「おく……稽古しよう」

デモ、また、琴の代役。

羅生「……『琴さん、実を言うとその腹の子の親は、俺だ』

デモ『えっ、お頭が?!』

羅生「(有頂天) やるじゃねえか、出来るじゃねえか」

ウシ「お頭、増やしやすか？」

羅生「やってやろうじゃねえか」

シギ『はつきり言うが』を付けやしよう」

羅生「(ヤブに) 言ってやれ、言ってやれ」

ヤブ「何処に入れるんですか？」

羅生「(シギに) 何処に入れるんだ？」

シギ『実を言うと、はつきり言うが、その腹の子の親は、俺だ』

羅生「(ヤブに) 言ってみろ」

ヤブ『実を言うと』……」

一同「うん」

ヤブ『はつきり……いうが』……」

一同「うん」

ヤブ『その……腹の子は』……」

一同「うん」

ヤブ『俺だ』……」

一同「おおー(言えた)」

羅生、ヤブの頭を叩き、

「お前の訳ねえだろ！ もう一遍、言ってみろ」

ヤブ『実を言う……はつきり……言うが』(泣き出す)」

羅生「泣くことねえじゃねえか」

ヤブ「……『はつきり言うが』」

一同「うん」

ヤブ「……『その腹の子は』」

一同「うん？」

ヤブ「……『子の親は、俺だ』」

「言えた」「言えた」と、一同、抱き合って喜ぶ。

羅生「稽古しよう、稽古しよう」

デモが、ウロウロして稽古の場所が決まらない。

羅生「早く、稽古しようよ」

デモ、決まる。

羅生『琴さん、実を言うとはつきり言うが、その腹の子の親は俺だ』

デモ『えっ！ お頭が?!』

羅生「完璧だな！」

羅生、気をよくして、琴に近づく……が、

羅生「……忘れたあ」

琴、ゆっくりと起き上がる。

羅生「起きた…起きた」

と、羅生、琴から逃げ腰。

一同、羅生を琴のところへ押しやる。

羅生「……駄目だ、起きてちや言えないよ、俺」

一同、羅生を琴の傍らに座らす。

羅生「琴さくん(愛嬌よく手を振る)……『実を言う』……」

一同「なあ……(琴に)『はつきり言う』……」(一同にな

あー……(琴に、威厳を正し)『その腹の鱈子は俺が食う』

デモ「えっ！ お頭が?!』

一同、ガックリ。

ウシ「……『その腹の子の親は』、お頭だって言いたかったんですよ」

シギ「そ、そうなんです……良かったね、琴さん」

羅生「もつと早く言おうと思ってたんだが……口がまがらねえの

……つまり……自分たちの手前」

琴「……恥ずかしかったの」

羅生(照れて)「恥ずかしくって〜」

アジ「馬鹿だねえ、お頭」

カラ「もつと、早く言えばよかったのにね！」

羅生『おい、琴、飯の支度しろ〜!』……なんて」

琴「ええ、よかった。こんな優しい人たちに会えて……」

羅生「優しいって……(照れる)」

琴「……お頭！」

羅生「えっ！」
琴「帰るわ」

羅生「帰る？……何処へ？（錯乱している）」

琴、優しく羅生を見つめ、頷く。

羅生「（我に還ったように）おい、皆、帰るってよ……よし、支度しろーい!!」

一同「おおーっ!!」

羅生、去りながら、

「……どっと疲れたぜ」

アジが遅れて去りかける。

琴「アジさん」

アジ「えっ」

琴「ごめんなさいね」

アジ「え、何が？」

琴「嘘の嫌いなお頭に、嘘までつかしちゃって……」

アジ「（うつかり）いや、いいんですよ（と、言っ）あッ!!」

23 同、山道。

山賊たちが、琴を駕籠（輦れんたい）に乗せ下りて来る。

駕籠に揺られる、琴——まるで、花嫁のように。

羅生、山路の花を手折って、琴に手渡すと、行く手の彼方を指さす。

琴の眼が、遙か故郷へと向けられる。

一同、ストップモーション

○

清七が、司山の山道を登ってくる。

その、清七の後を追う、七吉。

清七と七吉、ストップモーション

——清七の脳裏に、琴の思い出が蘇る。

24

清七の回想。

○子供の清七が、鳥とり籠もちの付いた竹竿を手に、蝶を追っている。

子供の琴が、清七を追って来る。

小川を飛び越す、清七。琴は、飛ぶことができず、清七を呼ぶ。

清七、琴を背負い小川を渡る。が、川の真中で足が深みにとられ、動けなくなる。泣く、清七と琴。

○清七が、琴にプレゼント（小箱）を渡す。

琴が、お返しのプレゼント（中箱）を持って来て、清七に渡す。

清七が、これまたお返しと、プレゼント（大箱）を持って来て、琴に渡す。今度はどんなプレゼントかと、楽しみに待つ清七だが、琴を見て、顔を蒼白にして逃げ去る。

琴、蛇をぶら下げて現れる。が、清七がいないので、泣き出す。

○悪餓鬼たち（山賊たちが演じる）が、琴に飴玉を渡し、着物をめくれと命令する。

琴、チラット裾を上げる。喜ぶ悪餓鬼たち。

悪餓鬼たち、また、琴に飴玉を渡し。琴、また、チラット裾を上げる。悪餓鬼たち、今度は、飴玉をどっさり琴に渡し、裾をいっぱいにくれと催促する。琴、どうすることもできずに、困る。

そこへ、清七が跳ぶように現れ、琴の飴玉を全部口に含むと、悪餓鬼たちに禪が見えるほど裾をめくって見せる。

愕然と倒れ込む、悪餓鬼たち。

○闇のなかに、人魂が飛んでいる。

お化け屋敷。さらし首が、幾つか並んでいる（山賊たち）。

受付の幽霊に切符をわたして、琴と清七が来る。

清七、怯える琴の手を引いて、さらし首の顔を見て歩く。どれもこれも、みな可笑しな顔なので笑いだす、清七。ところが、一つの首にさしかかったとき、首（羅生）がぱっくりと口を開ける。

気絶する、清七。

琴、いきなり、さらし首の頬にビンタを食らわす。

驚く、他のさらし首。

○

同、お化け屋敷。

手が数十本の化物がいる（山賊たち）。

琴が、小用を催しモジモジしている。清七、化物に便所の在処を聞くと、数本の手が、指差す。清七、化物に礼をいい、立ち去ろうとすると、手の一本が、ちり紙を清七に手渡し。化物に礼を言い去って行く、清七と琴。

——琴との楽しかった日々が、走馬灯のように現れては消えて行く。

25

司山の山道。

山賊の隠れ家に向かって、矢のように走る、清七と七吉。

その時、山を揺るがすように轟く、数十の銃声。

清七と七吉の足が、硬直して止まる。

26

森のなか。

鮮血に染まり、息絶えている、羅生、ヤブ、カラ、シギ、アジ、ウシ、デモ。

絹のような雨が、その屍に降り注いでいる。

琴にも銃弾が命中したのか、身体に血を滲ませ倒れている。

微かに動く琴……。

琴

「うーっ……（産気づく）……生まれるの……生まれるのね……

……よかった……今日が、お前の、お誕生日ね……。雨が降ってるわ……（息絶えている山賊たちが眼に入る）誰もいないけど……母さん、一人だけ……いいでしょ……」

27

久路川。

琴は、傷ついた軀を引き摺り、ここまで来たのだ。
琴 「さあ、川よ……久路川……この川を流れて行けば……お家に
帰れるのよ、大祖父様や……お祖母様……叔母様に、それに……
……みんな……お前と、私の帰りを待つてるわ……帰りましょ……
……」
雨が、優しく琴を包んでゆく……。

28

山賊の山家。

紅蓮の炎に包まれた、山家。

清七が、駆け寄る。

煙から逃れるように、鉄砲を抱えた貴崎の兵隊が一人、清七の
前に現れる。

清七、その顔をみて愕然とする。

清七 「……弥之丞！」

煤すすで汚れた弥之丞の顔が、恐怖で痙攣している。

清七 「……お、お前が?!……馬鹿野郎!!」

弥之丞を殴り倒す、清七。

その清七の眼が、谷川を流れゆく琴をとらえる。

清七 「あっ！ あれは……琴……琴……つ!! (絶叫)」

琴を追う、清七。

弥之丞も、思わず清七の後に続く……。

琴が流れてゆく……。

清七の前を、弥之丞の前を、鈴の墓の前を……。

川の流れば、激しさと優雅さをそなえている。川面に漂う琴の
姿は、美しい蝶が風に舞っているかのように見える。

○

絹の雨のなかに舞う、琴。

羅生、ヤブ、カラ、シギ、デモ、ウシ、アジが、琴を見守って
いる。

○

赤子を抱き、幸福に満ちた、綾がいる。

一輪の花を手にした、鈴もいる。

全ての思い出を乗せ、久路川の流れに舞う、琴。

その流れの彼方——、

琴の帰りを待つ、千代と登与は、茶を啜っては笑い、昔話に興
じていることだろう。

29

久路川のほとり。

堤の桜は、満開である。

——暮れなずむ川のほとりに、あの釣り人が、いつまでも、い
つまでも釣り糸を垂れてる。

魚が跳ねる……ボチャン。

冠